水の話

FujiClean NEWS

2025 Spring

NO.207

［特集］

水インフラを守る エッセンシャルワーカー

見直される公共トイレと衛生作業員の活躍

フジクリーン工業株式会社

代々木深町小公園トイレ

水インフラを守るエッセ ンシャルワーカー

はるのおがわコミュニティパークトイレ　写真：永禮賢 提供：渋谷区

笹塚緑道公衆トイレ

西参道公衆トイレ

見直される公共トイレと衛生作業員の活躍

新型コロナウイルスの流行をきっかけに、「エッセンシャルワーカー」という言葉が広く浸透しました。
その中には、暮らしに密接した水道や下水道などを支える水インフラの従事者も存在しています。
また2020（令和2）年より実施された東京・渋谷区の「THE TOKYO TOILET」プロジェクトでは、
公共トイレのイメージを変えるとともに、メンテナンスや清掃にも注目が集まりました。
水を取り巻くエッセンシャルワーカーたちの、さまざまな働きや活躍をお伝えします。

［ 取材協力・写真提供・資料提供 ］
○ 渋谷区
○ 特定非営利活動法人
　ウォーターエイドジャパン
○ 東京サニテイション株式会社
○ ノザキ株式会社

［ 参考資料 ］

○ エッセンシャルワーカー 社会に不可欠な仕事なのに、なぜ安く使われるのか（田中 洋子　編著／株式会社旬報社 発行）
○ 地域を支えるエッセンシャル・ワーク 保健所・病院・清掃・子育てなどの現場から（山谷 清志・藤井 誠一郎 編著／株式会社ぎょうせい 発行）
○ Wedge 2024年7月号（株式会社ウェッジ 発行）
○ 日本財団ジャーナル　HP https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2020
○ Mizu Design　HP https://mizudesignjournal.com/opinion/

社会機能を維持し、日常を支え続ける“エッセンシャルワーカー”の　現実。

コロナ禍で浮き彫りとなった日常を支える人々

2020（令和2）年、新型コロナウイルスの感染拡大によって、世界中が経験したことのない不安に包まれました。ヨーロッパやアメリカなどでは次々にロックダウン（都市封鎖）が行われ、日本でも緊急事態宣言が発令されると日常生活や社会経済活動に大きな制限が課せられました。さまざまな活動が止まる中で、注目を集めたのが「エッセンシャルワーカー」です。医療現場を支える医師や看護師をはじめ日常を支える仕事に従事する人々は、政府から感染拡大時にも働き続けて欲しい社会機能維持者、「エッセンシャルワーカー」に位置づけられました。具体的には電気・ガス・水道などのライフライン、交通や物流、生活必需品を提供する小売業、高齢者・障がい者支援、ゴミ処理、メディア、金融、行政、育児関連などの事業が該当します。もしも病院から医師や看護師がいなくなったら、もしもゴミを収集する人が来なかったら、もしも店に店員や商品を届ける人が来なかったら…。私たちはコロナ禍という経験によって、当たり前の日常が多くの人の支えによって保たれていることに気付かされたのです。

24時間水の安心を届ける水インフラの従事者

エッセンシャルワーカーの中には、あまり気付かれずに社会や暮らしを支えている仕事もあります。その一つが、水道施設や下水道施設、廃水処理などの専門家である水インフラの従事者です。アメリカ国土安全保障省では、新型コロナウイルス拡大を受け2020（令和2）年に「重要なインフラストラクチャの労働力に関するガイドライン」を公表し、その中で特定した16の重要なインフラセクターの中にも「Water（水インフラ）」は含まれています。

日本での上下水道サービスは、24時間365日、止まることはありません。やむなく停止するのは、大規模な震災や事故の時だけです。感染予防の面で考えると、手を洗うなど体を衛生的に保つための水をつくるのが上水道、洗った後の汚れた水や排泄物を安全な水へと処理するのが下水道や浄化槽、廃水処理になります。元々、水道施設整備の必要性が高まった要因が1800年代後半から発生したコレラの流行だったように、衛生を保つために水は不可欠です。水インフラによって安全な水を24時間途切れさせることなく届けることで、私たちの公衆衛生は守られています。

人知れずウイルスと対峙する下水処理の現場

水インフラの中でも、飲み水である上水に比べ、下水については一般的に意識されづらい仕事です。下水処理設備が正常に動き続けるためには、運転管理や清掃、点検・整備などが必要です。こうした仕事に従事する人は、当然、ステイホームができるわけでもなく、現場に行き、各家庭から流れてきた排水やし尿と対峙しなければなりません。時には下水処理場につながる下水パイプの中や下水処理をする前の沈殿池など、未処理の下水がある場所で作業する場合もあります。また浄化槽については、各家庭に年1回の清掃が義務付けられています。そのため浄化槽清掃の会社は、コロナ禍においても人との接触を抑えながら、各家庭を訪問し浄化槽に溜まった汚泥の引き抜きや各装置の洗浄などの業務を続けました。中には感染者が入院する病院に設置された排水施設の清掃を請け負うこともあり、その際には、医師と綿密な打ち合わせをした上でさらに厳重な感染対策を行い実施したそうです。止めることのできない水インフラだからこそ、そこに従事する人々の多くは、社会的責任の大きさをプライドに変えて仕事に向き合い続けています。

浄化槽・汚水槽の清掃現場。浄化槽は汚泥を除去する清掃を怠ると機能低下につながり、悪臭の原因になるだけでなく、汚れた排水を流すことになります

過酷な海外の衛生作業員の実態

海外に目を向けてみると、さらに厳しい環境の中での作業を強いられているエッセンシャルワーカーがいます。国によってはいまだ下水処理施設が整備されておらず、衛生作業員が原始的な道具や素手で排泄物のくみ取りをしています。清潔な水、トイレ、衛生習慣の普及を目的に、世界30カ国に拠点を置き、22カ国で水・衛生支援を行う国際NGOウォーターエイドでは、2021（令和3）年に新型コロナウイルスのパンデミックで浮き彫りになった衛生作業員たちの置かれた現状や課題をまとめた報告書を公表。報告書では、南アジアで実施した衛生作業員の安全と健康に関する調査の結果が紹介されています。例えばバングラデシュでは、インタビューを受けた作業員の8割が「自分の仕事が原因でウイルスに感染しやすいのではないか」、3分の2が「自分の家族の感染リスクも高くなるのではないか」という不安を抱える実態が結果に表れています。またインドでは、インタビューを受けた病院勤務の衛生作業員のうち、安全に仕事をするために必要な防護服一式を持っている人は一人もいないなど、驚くべき現状も見えてきました。ウォーターエイドでは、こうした現状を広く発信するとともに、高い感染リスクにさらされる衛生作業員に対する、保護、尊重、支援、投資を、各国政府や現地当局、雇用主、一般社会にも呼びかけています。

■ 重要な調査結果（一部抜粋）

※すべてインタビューや質問を受けた衛生作業員の中での割合

インドでは**衛生作業員の40%**、バングラデシュでは**39%**が、**仕事場に手洗い設備がありません**でした。

ネパールでは**衛生作業員の3分の1**は、雇用主から**個人防護具**（PPE）**をいっさい支給されていません**でした。

バングラデシュでは、質問を受けた**衛生作業員の3分の1**が、**ロックダウン中に仕事を休むと職を失うかもしれない**という不安を抱えていました。

ウォーターエイドの報告書はこちらからご覧いただけます

1. トイレのくみ取り人・排泄物の運搬人　2. 排泄物を手作業で取り除いたり、家庭ごみを集める仕事に従事する女性　3. くみ取った排泄物を運び出す衛生作業員

1

公共トイレのイメージを革新的に変えた「THE TOKYO TOILET」プロジェクト。

従来のイメージを覆す「おもてなしのトイレ」

水インフラに関わるエッセンシャルワーカーの仕事は、暮らしの衛生システムを機能させているにもかかわらず、これまであまり注目されてきませんでした。特に排泄は、生きていく中で当たり前のことながらも、多くを語ることが避けられる傾向にあります。そうした中、「トイレ」という場所を全く新しい視点で見直し、注目を集めたのが、「THE TOKYO TOILET（以下TTT）」プロジェクトです。

TTTプロジェクトは、東京・渋谷区の17カ所の公共トイレを、世界で活躍する16人のクリエイターがデザインし、生まれ変わらせていった革新的な取り組みです。プロジェクトの発案者は「ユニクロ」で知られる株式会社ファーストリテイリング取締役の柳井康治氏で、渋谷区と日本財団による「ソーシャルイノベーションに関する包括連携協定※」により、渋谷区の全面協力、日本財団の維持管理のもと、プロジェクトはスタートしました。世界的にも日本のトイレの清潔さや機能性は有名なのに比べ、公共トイレの多くが「4K（汚い、臭い、暗い、怖い）」といったネガティブなイメージをもたれ、その多くはほとんど利用されていません。さらに障がい者や子供は使いづらいなどの問題もあります。こうした課題をデザインやクリエイティビティで解決し、公共トイレを性別、年齢、障がいを問わず、誰もが快適に使用できる場所に変えることを目指したのです。

渋谷から発信するインクルーシブな社会

TTTプロジェクトの実施場所は、日本の文化・情報の発信地である渋谷区。当時、2020東京オリンピック・パラリンピックの開催が控えていた背景もあり、公共トイレを起点に多様性や思いやりのあるインクルーシブな社会の実現をより広く知ってもらうために、区の中でも多くの人の目に触れる17カ所が選定されました。そして、こうした想いに賛同してくれたのは、安藤忠雄氏、隈研吾氏ら著名建築家をはじめ、坂倉竹之助氏、佐藤可士和氏、NIGO®氏など世界的に活躍する16人のクリエイターです。過去においてデザインやクリエイティブの力で社会課題を解決してこられた実績を持った建築家やデザイナー、クリエイティブディレクター、大学教授など、幅広いカテゴリーの方々が参加しています。各クリエイターに提案いただいたデザインをもとに、安全上の問題などを考慮して協議を行い最終的なデザインが決定。多様なコンセプトを持つ個性豊かなトイレが次々と誕生していきました。

※渋谷区基本構想の理念および日本財団のビジョンを実現するため連携し、ソーシャルイノベーションによって社会課題の解決を図る、先駆的な取り組みを支援するための協定（2017年締結）

個性とアイデアが溢れる17のトイレ

最初のトイレが公開されたのは、2020（令和2）年8月5日、恵比寿公園トイレ、代々木深町小公園トイレ、はるのおがわコミュニティパークトイレの3カ所です。中でも坂茂氏の手がけた「ザ トウメイ トウキョウ トイレット」は、無人の時は中が透けて見えているが、人が入って施錠するとガラスが不透明になるという斬新な仕組みが、SNSで世界中に拡散され大きな話題となりました。他にも、街灯の少ない地域で周囲を明るく照らす行燈のような役割を目指したトイレや、木材をふんだんに使用して子供たちの遊び場にもなるトイレ、ドアノブなどに直接触れたくない人を考慮した非接触式トイレなど、一つひとつのトイレにたくさんの工夫やアイデア、使う人へ思いやりが込められています。こうしてTTTプロジェクトのトイレは、2023（令和5）年3月に西参道公衆トイレの完成によって、計画していた17カ所の設置がすべて完了しました。最近は、建築ファンやアート好きの人たちだけでなく、海外からの観光客も見学に訪れています。安全で清潔な誰もが使えるトイレを作り出していることに多くの驚きと称賛の声があがっています。

1. 【恵比寿公園トイレ】コンクリートでできた15枚の壁が組み合わさり、迷路のようにわくわくする空間
2. 【鍋島松濤公園トイレ】杉板に囲まれた5つの小屋が、「森のコミチ」でつながります
3. 【西参道公衆トイレ】オストメイトやおむつ交換台などを設置したユニバーサルトイレ
4. 【七号通り公園トイレ】マッシュルームのような不思議な外観。すべての行動を音声で行うことのできる非接触トイレです
5. 【西原一丁目公園トイレ】気軽に立ち寄れる明るい雰囲気。夜には、やさしい灯りが行燈のように周囲を照らします

2

3 写真：永禮賢 提供：渋谷区

4

5

見えない仕事を理解し、働き手を支えられる社会へ。

快適を維持する清掃・メンテナンスへのこだわり

公共トイレのイメージを覆してきたTTTプロジェクトのもう一つ大きな特徴が、トイレを清潔に保つために清掃・メンテナンスを徹底している点です。トイレの完成がゴールではなく、トイレを利用する人に快適に使い続けてもらうことがプロジェクトの真価と言えます。これまでの清掃内容や清掃頻度にとらわれず、新しい維持管理の方法が必要であると考えました。清掃は1日最大3回の通常清掃に加え、1カ月に1回の定期清掃、さらに年に1回は外壁や照明設備、換気扇まで徹底的にメンテナンスを行います。さらに、維持管理を行う清掃員が気持ちよく作業に従事できること、清掃作業自体にも注目が集まることが重要であると考え、清掃員の方が着用するユニフォームは、若者を中心に高い人気を誇るデザイナーのNIGO®氏がデザイン。周囲から憧れられるようなユニフォームを着用することで、清掃員の方々のモチベーションを高めるとともに、トイレ清掃のイメージアップにつなげています。現在、TTTプロジェクトのトイレの維持管理業務は渋谷区に完全移管されましたが、今もなお、快適で清潔なトイレ環境の維持・向上が継続されています。

支える人へのリスペクトを醸成する

2023（令和5）年に日本で公開された映画『PERFECT DAYS』は、国際的な賞も受賞するなど世界的に注目を集めました。主演の役所広司さんが演じたのは、TTTを舞台としたトイレの清掃員で、普段あまり注目されることのない清掃員の日常が描かれています。こうしたことからも、TTTプロジェクトがトイレのイメージを変えただけでなく、その環境を支える人たちの存在にも光を与えたことがわかります。

コロナ禍を契機に広まった「エッセンシャルワーカー」という言葉は、同時にその人たちの存在を気付かせてくれました。多くのエッセンシャルワーカーが意義ややりがいを持って仕事に臨んでいる一方で、日本では深刻な働き手不足の課題に直面しています。本格的な人口減少化時代に突入した現代、今後も社会活動を円滑に循環させていくためにも、社会全体でこうした課題に向き合うことが必要です。私たち一人ひとりが、利用したトイレの後に、捨てたゴミの先に、流した廃水の向こうに、懸命に働く人々の姿をイメージすること。それが、エッセンシャルワーカーへの尊厳を育み、社会の支え手である人材を増やす第一歩になるのではないでしょうか。

【THE TOKYO TOILET プロジェクト趣旨】

〈THE TOKYO TOILET〉は、多様性を受け入れる社会の実現を目的に実施する公共トイレプロジェクト。性別、年齢、障害を問わず、誰もが快適に使用できる公共トイレを渋谷区内17カ所に設置。趣旨に賛同する16人のクリエイターが参画し、デザイン・クリエイティブの力で、新しい社会のあり方を提案します。

2018年、柳井康治氏の発案・資金提供によって発足し、渋谷区全面協力の下、日本財団が維持管理を実施した〈THE TOKYO TOILET〉プロジェクト。2023年に全17カ所の公共トイレ整備を完了し、2024年4月1日以降、渋谷区が維持管理を実施しています。トイレの設計施工には大和ハウス工業株式会社、トイレの現状調査や設置機器の提案にはTOTO株式会社の協力を得ています。

プロジェクト名：THE TOKYO TOILET
読み方：ザ・トウキョウ・トイレット
管理者：渋谷区（2024年4月1日～）
プロジェクト発案／資金提供者：柳井康治
Project Name : THE TOKYO TOILET
Project Administrator : Shibuya City (From 1 April 2024)
Project founder and financial contributor : Koji Yanai

1. THE TOKYO TOILETすべてに、佐藤可士和氏デザインのピクトサインを使用。視認性の良さに加え、ユーザーに柔らかい印象を与えられるように作られています
2. NIGO®氏がデザインを監修した、背中のロゴが印象的な清掃員のユニフォーム

ヨリミチコラム +Story yorimichi column

〈TTTプロジェクト トイレ清掃の現場から〉

清掃は利用者のモラルをつなぐ仕事。トイレを通じて思いやりある社会をつくっていく。

◀▲ 清掃体験の様子

快適を維持するためのもう一つの挑戦

クリエイティブな発想でトイレのイメージを変えたTTTプロジェクトは、清掃やメンテナンスでも新しい挑戦をしています。清掃方法には、ほとんど水を使用しない乾式清掃を採用。これまで屋外トイレの清掃では、床に水と洗剤を撒いて水圧で汚れを落とす方法が一般的でしたが、ズボンなどを下ろした際に濡れる恐れがあることが懸念されていました。そのため、より快適に使ってもらうことを目指し、デパートや飲食店といった屋内トイレで用いられる乾式清掃での実施を目指しました。しかし屋内と屋外では汚れの種類が全く違うため、清掃方法や道具・洗剤、一つひとつの見直しが必要になりました。さらにTTTプロジェクトのトイレは一つひとつ形も素材も違います。例えばステンレス製のトイレには傷のつきにくいきめ細かいクロスを使用したり、酸性洗剤が使えないモルタル製の床には中性や弱酸性の洗剤を使ったりと、トイレごとに最適な方法を見つけ出すことで、公共トイレの寿命も伸ばしています。また、1日最大3回の清掃結果をデータ化し、どのトイレがどのように利用されているかを分析し、いわば各トイレのプロフィールを作成。利用頻度の高い時間を把握し、いつ清掃に入るのが最も効果的なのかを分析することでより効率的な清掃活動につなげています。

トイレへの愛情を育てる子供向け清掃体験会

さまざまな努力と工夫で清掃を行っている公共トイレですが、清掃員の力だけでは綺麗な環境を維持できないのが現実です。TTTの公共トイレ清掃業務を請け負っている東京サニテイション株式会社の渡邊専務は「実はトイレを綺麗に保っているのは、清掃員でなく利用者の方々。いくら私たちが完璧に清掃をしても、次に利用した人がモラルのない使い方をすれば、次にそのトイレを使う人は「ここのトイレは汚い」という印象を抱いてしまいます。だからこそその仕事は、壊れてしまったモラルをリセットし、改めてモラルをつないでいってください、というメッセージを残す役割だと思っています」と語ります。こうしたトイレに対するモラルや清掃への理解を広めようと、東京サニテイションでは年に1回、子供を対象としたトイレ清掃体験会も開催しています。「近年、コロナ禍の影響もあり学校や会社で清掃業務の委託化が進むなど、私たちの生活と清掃に距離が生まれているように感じます。清掃を体験することで、清掃の大切さや公共施設への関心を育てたいですね」。公共のトイレを綺麗にするのは清掃する誰かではなく、利用する自分。人の目に触れないトイレという個室の中で、私たちは社会の一員としての自覚や責任を試されているのかもしれません。

NEWS

「国連グローバル・コンパクト（UN Global Compact）」に加入しました。

「国連グローバル・コンパクト（以下UNGC）」は、1999（平成11）年の世界経済フォーラムで、当時のアナン国連事務総長によって提唱されました。参加企業や団体が社会の良き一員として行動し、持続可能な成長を実現するための自発的な取り組みで、人権、労働、環境、腐敗防止に関する10の行動原則から成り立ちます。UNGCへの取り組みを表明した企業は、適切な審査を経て正式な加入を認められ、その実現に向けて努力を継続しています。世界では、2025年1月の時点で約160カ国、17,500を超える企業・団体が署名。フジクリーンは2025年1月に加入し、「フジクリーン人権方針」に基づいた社会的責任を果たす取り組みを積極的に推進していきます。

フジクリーンWebサイト
人権方針ページはこちら

国連グローバル・コンパクトの10原則

人権
原則1　人権擁護の支持と尊重
原則2　人権侵害への非加担

労働
原則3　結社の自由と団体交渉権の承認
原則4　強制労働の排除
原則5　児童労働の実効的な廃止
原則6　雇用と職業の差別撤廃

環境
原則7　環境問題の予防的アプローチ
原則8　環境に対する責任のイニシアティブ
原則9　環境にやさしい技術の開発と普及

腐敗防止
原則10　強要や贈収賄を含むあらゆる形態の腐敗防止の取組み

メディア

日本貿易振興機構JETROの公式番組で、フジクリーンが紹介されました。

日本貿易振興機構JETROでは、世界の経済・産業の最新動向や貿易・投資などの国際ビジネスに役立つ情報を国際ビジネス情報番組「世界は今 -JETRO Global Eye」で配信しています。当番組の2024年12月26日配信回「エジプト砂漠に新首都!?インフラ整備のニーズを取り込め!」において、フジクリーンが参加した「エジプト再エネ・水素・水インフラミッション」の様子が取り上げられました。

現在エジプトでは、新行政首都を建設中のためインフラ整備が急務となっています。そこで2024（令和6）年9月23～26日にかけて、日本企業・団体の現地調査を目的にビジネスミッションが実施され、フジクリーンを含む総合商社、エンジニアリング企業、メーカー、エネルギー関連企業、政府機関など23社・団体が参加。番組では、エジプト政府や企業との意見交換や事業現場の視察などが行われる中、フジクリーンは省庁でのプレゼンテーションや関係者との商談会に参加し、現地ニーズへの理解を深めている様子がご覧いただけます。

JETRO
公式YouTube
チャンネル

JETRO
Webサイト

お知らせ

フジクリーンWebサイトにコンプライアンス通報窓口を設置しました。

フジクリーンの役職員によるコンプライアンス違反等を未然に防ぎ、万一発生した場合でも対応を早期にかつ適切に図るため、取引関係のある方が、このような行為を直接通報できるためのコンプライアンス通報窓口を設置しました。

お知らせ

静岡営業所が事務所を移転しました。

2025（令和7）年1月27日より、静岡営業所が事務所を移転しました。新事務所は下記になります。

静岡営業所
新事務所開所日 2025年1月27日

〒422-8042
静岡県静岡市駿河区石田1-1-46
しずおか焼津信用金庫
石田支店ビル3階C号室
TEL.054-286-4145
FAX.054-286-4146
※TEL、FAX番号は変更ございません。

働きがい向上紹介17

多様な価値観と働き方を尊重。人事ポリシーを定めました。

フジクリーンでは、組織と社員に関する基本的な考え方を言語化し共通認識を図ることを目的に、人事ポリシーを定めました。これまで大切にしてきた価値観・考え方に加えて、これから大切にしていきたいことを全社員に向けて表明しました。この人事ポリシーに従って社員一人ひとりが誇りを持って挑戦的な仕事を行い、社会に広く貢献する会社を目指します。

フジクリーンのWebサイトにて、全文を公開しています。ご興味を持っていただいた方は、是非ご覧ください。

フジクリーンWebサイト
人事ポリシーページはこちら

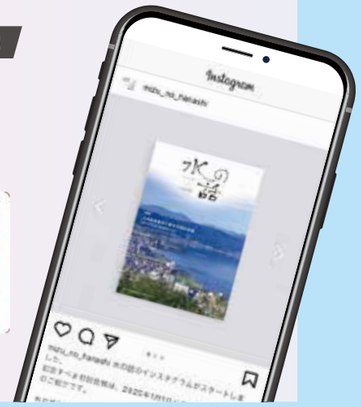
TOPICS

水の話 Instagramを開設しました。

水の話の魅力をより多くの方に知ってもらうため、水の話の公式Instagramを開設しました。取材で訪れたさまざまな地域の美しい風景をはじめ、現地のグルメや取材撮影の裏話なども投稿予定です。紙面には掲載しきれなかった写真など、水の話をより深く楽しめる内容となっています。アカウントのフォローと「いいね!」をお待ちしております!

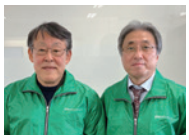
Follow me!

MIZU_NO_HANASHI



もっと
motto!
広げよう
水環境をきれいにする取り組み

〈愛知県名古屋市〉
任意団体
愛水ボランティア



代 表 杉浦 誠治さん(左)
事務局 小瀬村 昌治さん(右)

大規模地震発生時の水道インフラを、長年培った経験とスキルでサポートする。

愛知県企業庁の管路研修施設での研修会

▲イベントに出展し、水の大切さをPR

◀給水車の使い方を周知

愛知県において水道事業や工業用水道事業等を行っている愛知県企業庁。「愛水ボランティア」は、その企業庁の退職者によって構成されたボランティア団体です。結成のきっかけとなったのは、2003(平成15)年に策定された愛知県営水道※地震防災対策実施計画。この計画の震災対策の一つとして、県営水道事業に携わってきた退職者が、震災時に県と協働して情報収集や応急給水、応急復旧活動を支援する協力制度が設けられたことでした。当時はちょうど団塊の世代が退職を迎える時期でもあり、退職者がこれまでに培った水道に関する豊富な専門知識や経験を活かして、大規模地震時の応急対策を効率的に行おうと考えたのです。開始当時、この制度に登録したのは67人。このメンバーが、制度をさらに効果的に運用するため、日頃から支援ができる体制を整えるとともに水や水道に関する環境保全などの幅広い活動を行っていこうと、2007(平成19)年に任意団体「愛水ボランティア」を立ち上げました。

愛水ボランティアの活動の目的は、県内で震災が起きた際に現場に駆けつけ、現役職員を助けて速やかな応急給水や応急復旧作業を行うこと。幸い、発足後に震災は発生していませんが、その時に備え、定期的に訓練や研修に参加しています。例えば昨年は、愛知県企業庁の管路研修施設や水道災害活動拠点の視察、県から講師を招いての講演を行い、新しい技術や知識の習得にも努めています。他にも会員は県内地域ごとの3つのグループに分かれ、地元の防災訓練や企業庁の水道PRイベントなどにも参加。住民に災害時に使用する給水車の使い方のレクチャーなども行います。また、水源地の環境保全を目的として、木曽川の源流・長野県の木祖村に足を運び、森林の植樹や下草刈り活動を実施。木祖村の人々と交流し、安全でおいしい水が飲めることの感謝を伝えています。

団体発足から17年を迎えました。高齢化などの課題もありますが、水道の技術屋集団として、経験を活かした活動を今後も続けていきたいと思います。

※県営水道では、市町村に代わり水道の水源を確保し、浄化した水を市町に卸売り供給しています。

美しい水を守る
フジクリーン工業株式会社

本社　名古屋市千種区今池四丁目1番4号　〒464-0850　TEL(052)733-0325　https://www.fujiclean.co.jp

札幌支店 (011)738-5075
東北支店 (022)212-3339
東京支店 (03)3288-4512
名古屋支店 (052)249-5100
大阪支店 (06)6396-6166
福岡支店 (092)441-0222
盛岡営業所 (019)604-2527
郡山営業所 (024)937-0800
茨城営業所 (029)851-0031
宇都宮営業所 (028)625-4650
群馬営業所 (027)327-5611
埼玉営業所 (048)660-5050
千葉営業所 (043)206-5171
新潟営業所 (025)271-8668
山梨営業所 (055)275-9300
松本営業所 (0263)27-2080
岐阜営業所 (058)271-1131
静岡営業所 (054)286-4145
三重営業所 (059)213-5520
和歌山営業所 (073)422-3634
広島営業所 (082)843-3315
高松営業所 (087)869-8680
松山営業所 (089)967-6123
高知営業所 (088)803-1520
佐賀営業所 (0952)31-9151
熊本営業所 (096)388-3571
大分営業所 (097)558-5135
宮崎営業所 (0985)32-3064
鹿児島営業所 (099)257-3501
沖縄営業所 (098)862-9533

FSC www.fsc.org
ミックス
紙 | 責任ある森林管理を支えています
FSC® C014687

発行 2025年4月1日
フジクリーン工業株式会社「水の話」編集室